

『竹林の故事』\*序

馮文炳君の小説はわたしの好きなものの一つだ。わたしは批評家ではないから、それが水準以上の作品かどうかは言えないし、またどの派の文学であるのかも知らないが、わたしは喜んでそれを読んだから、これはわたしがよいと思ったことの表示である。

わたしが好きな作品はいろいろの種類がある。文芸復興の時代に猥褻な話をしたリヨンの医者、18世紀にえげつない話をしたアイルランドの神父、近代に不道德な小説を書き人間の心を生きたまま解剖したフランスとスウェーデンの狂人、……わたしはいずれも喜んで読む。だがどうしてだかどれもいささか“隠逸的”で、時には少し穏やかなものが読みたくなる。ちょうど木陰に閑坐するのが好きな人でも、お日さんに晒されるのも快事であるように。わたしが馮君の小説を読むのは木陰に坐っている時である。

馮君の小説は別に現実逃避的だとは思わない。彼が描くのは大悲劇や大喜劇などではなく、平凡人の平凡な生活に過ぎない——だがこれがまさしく現実なのだ。特別な光明と暗黒はもとよりやはり現実の一部であるが、何がなんでもそれを書こうとしなくてもよい。もし自分で書きたいという必要を感じなければ、むしろそうした経験がなければ言うまでもない。文学は実録ではなく、一つの夢である。夢は別に醒めた生活の複写ではない。しかしながら醒めた生活を離れては夢も材料がなくなる。書くのが〔現実への〕反応の夢であれあるいは希望通りの夢であれ。馮君が書くのは多く農村の児女媮翁の事である。これはそれが彼が出会った人生の一部であるからだ、——だがこの一部は全体を代表するに足りるのだ。失恋した娘の黙した苦しみは必ずしも蓬髮薫香に、纏足の靴を履き、胸に鶏心石のペンダントをかけた女が恋のために長嘆息し、死ぬの生きるのと騒ぐのよりは悲哀でないことはないし、あるいは面白くないということもない。いつか著者の人生経験が次第に進展すれば、彼の芸術も自ずと変化し、我々はいまは著者が我々に読ませたいと思うところをもって満足すべきで、どうあっても彼に我々の考えによって改めさせようとするのはよくない。愛読するかしないかは我々の自由であるけれども。

馮君の著作の独立精神もわたしの感服するところである。彼は三四年来創作に専心し、一筋の道に沿って前進し、その平淡朴訥な作風を発展させた。これはとても喜ばしいことである。フローベールのようなよい先生、ベリンスキーのようなよい批評家がいたなら、確かに従うに値するだろうが、中国のどこにそういう人たちがいるか。そんな人たちを探そうとしても、石膏造りの女菩薩に線香を上げるか、でなければ天上の星の数を数えるかだろう。結果はヘトヘトに疲れて手を止めてしまうだろう、もしも少し賢明であれば。馮君は中外の文学からその趣味を涵養し、一方では独自に自分の道を行く。これは少し寂寞ではあるけれども、最も確実な行き方であり、わたしは彼がこうしていまよりもさらに独特な彼自身の芸術の大道を歩まんことを希望する。

こうした叢書は、いままでは他人の序はなかった。しかし一年余り前わたしは馮君に応諾してしまった。小説集を出す時は序を一篇書いてやると。だからいま一篇書かざるを得ない。これはわたし個人の意見を示しただけで、決して批評などというものではない。わたしは馮君を知っている、そして彼の作品を喜ぶものだ。だからいささか偏りを免れない。もし批評として読むなら

ば、そこはいささか“サクラのほめそやし”のような普通の評論であって、わたしの本意ではない。

一九二五年九月三十日、北京にて。

※初出：1925年10月『語絲』第48期

---

\* 『竹林的故事』 馮文炳著 短篇小説集 1925年10月新潮社初版 新潮社文藝叢書